

こども環境フェスティバル2013を開催しました

去る5月5日（こどもの日）に「こども環境フェスティバル2013」を開催しました。子ども達による環境学習発表「こども環境フォーラム」や投網教室、アクリルたわし教室、おもしろ実験室などの各種体験型イベントを実施し2,800人の多くの方にご来場いただくことができました。

また、当日は、おかげさまでセンター入館者50万人を達成し、50万人目の来場者にセンター長から記念品や花束を贈呈するなど記念セレモニーを併せて開催しました。

なお、運営に当たってはパートナー各位のご協力を得たところですが、今回は臨時駐車場の除草作業などの事前準備に5名のご協力をいただいたほか、当日37名のご協力をいただき盛況のうちに終えることができました。この場をお借りしてお礼申し上げます。
(センター：川田)



おもしろ実験室



入館者50万人セレモニー

“センター夏まつり2013”を開催します

霞ヶ浦水質浄化強調月間（7/15(月)～9/1(日)）のメインイベントとして、センター夏まつり2013を8月24日(土)に開催します。

『泳げる霞ヶ浦をめざして!』をテーマに、霞ヶ浦や環境について楽しく学べる様々な催し（おもしろ科学実験教室、めだか教室、霞ヶ浦クイズラリーなど）のほか、環境保全に取り組む市民団体等の紹介を行う予定です。

また、昨年もお子様を中心に大盛況でしたパートナーブースも、引き続き出展されることとなっております。今回も大いに盛り上がることを期待しております。

パートナーの皆様のご協力をいただき盛大に開催したいと思いますのでよろしくお願い申し上げます。
(センター：山中)



7月15日（海の日）～9月1日（霞ヶ浦の日）は「霞ヶ浦水質浄化強調月間」です

霞ヶ浦の汚濁の主な原因は、**生活排水**です。そこで茨城県が誇る霞ヶ浦の水質浄化を改めて考えると共に、「霞ヶ浦水質浄化強調月間」についてご紹介したいと思います。

○強調月間のはじまり

「霞ヶ浦の富栄養化の防止に関する条例」が昭和57年9月1日に施行されることが決まったことから、前年の56年に、8月1日から8月31日までを、「霞ヶ浦水質浄化強調月間」と定めたのが強調月間のはじまりです。

○強調月間のその後と「霞ヶ浦の日」

昭和56年に始まった強調月間は、昭和57年以降も引き続き同期間設定され、昭和58年9月1日には「霞ヶ浦の富栄養化の防止に関する条例」施行の1周年記念キャンペーンが開催され、この年から9月1日が「霞ヶ浦の日」として制定されました。その後、平成9年以降からは、7月の「海の日」から9月1日「霞ヶ浦の日」までと期間が変更され現在にいたります。

○今年度のイベントやキャンペーン

センター夏まつりや霞ヶ浦水質浄化ポスターコンクール、霞ヶ浦清掃大作戦などを開催する予定です。詳細はセンターホームページでお知らせいたしますので、皆様のご参加をお待ちしております。
(センター：渋谷)

パートナー新規登録者紹介



佐藤 裕太 所属グループ：研修、魚類

はじめまして、5月にパートナー登録させていただきました佐藤です。現役の土浦一高三年で、土浦市宍塚の活動では7年目になります。以前からセンターパートナーには関心がありましたが、今年度から共に作業をしている方がセンターで働き始めたので、これを機会に参加いたしました。



普段は農園や竹林・雑木林の管理や池での作業、法政大のサークルと交わったりなど様々なことに参加し、たまに執筆などもします。パートナーの活動でもたくさんのお話を学び、身につけていきたいと思っています。

そして、茨城大学農学部地球環境科学科を目指して居ります。

桜川自然観察会

梅雨の晴れ間の6月1日（土）に恒例の桜川自然観察会（於 つくば市 桜川漁協）が開催されました。はじめに桜川漁業協同組合長の鈴木さんから桜川の近況（アユ、ワカサギ漁獲量、カワウ・アメリカナマズの問題、放射能汚染の現状）の報告・解説があり、皆さん興味深く聞き入っていました。

その後例によって投網による魚とりがスタートしました。小学生の子供たち、親御さんをはじめ常連の高校生、パートナー・職員、みんなで夢中になって網を投げました。そして1時間もするとたちまちバケツに魚が溢れましたが、中でも砂地に棲むカマツカが特に多く採れ、またスゴモロコ、オオタナゴ、テナガエビなどもみられました。

昼食の後には組合長の御好意で、以前桜川で採れたワカサギの煮干しも試食することができました。さらにこの日はフナの幼魚の放流式も兼ねていて、成長を願いつつ皆で大海？に小魚たちを送り出してきました。参加者の皆さんの表情も実に豊かであって、お魚の自然観察会としては大分内容の濃い多彩なイベントになったものと感じております。さわやかな初夏の水辺のひとときでした。
(パートナー：新聞)



北イタリア旅行 — チンクエッテ・ドロミテ山塊・湖水地方・マッターホルン等 —



5月中旬に北イタリア地方の観光ツアーに参加した。航空会社はアラブ首長国連邦国営のエティハド航空で設立して8年目、初めて乗った。機上食はオカユや寿司等の和食メニューを取り入れ、DVDの内容も充実し、日本人観光客を取り込もうとする意気込みが感じられた。アブダビでのトランジットが長く、ミラノのマルペンサー空港に到着したのは次の日の午後であった。到着するとすぐに大型バスに乗り換え、ジェノヴァへ移動した。参加者は総勢14名(添乗員含)で、2席を一人で独占できた。ジェノヴァの観光は、ガイドさんが大変高齢者のためか？車内観光が大部分で、時々、申し訳程度に降りて、貴族の館の天井に描かれているフレスコ画の説明を行った。ガリバルディ通りには、16世紀頃スペイン王に協力して金融業で財を成した貴族の館が立ち並び、それが世界遺産になっている。自由に歩いてみたいところだが、そこ

はパッケージ旅行の辛いところだ。

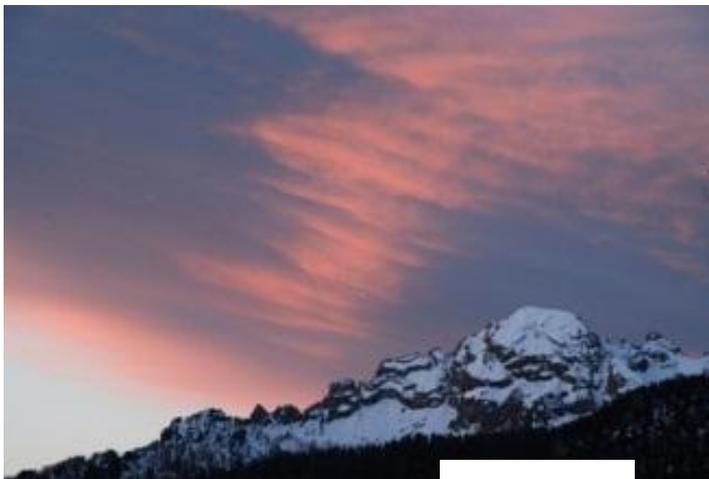
次の日はレバントまでバスで行き、チンクエ・テッレ（5つの土地）へ鉄道で移動した。ここは、12世紀頃のジェノヴァの要塞基地だったところで、三方が山に覆われて前方がリグーリア海に面した陸の孤島だ。昔は外の行き来は舟のみで、時代の流れに長く取り残されてきた地域だ。バスは入れないため鉄道を使って乗り降りしながら5つある村の3つ（ヴェルナツァ、マナローラ、リオマッジョーレ）の漁村を散策した。赤、黄、ピンクなど色とりどりのカラフルの4～5階建ての家が切り立った崖の上に建っている。建屋を高くしてあるのは城塞の役目をはたすためだそうだ。また、段々畑をつくるため数世紀にわたって急斜面を削り、莫大な人間のエネルギーが投じられ



チンクエッテ・マナローラ

てきた。今は、幾重にもやせた土地にびっしりブドウの木が植えられている。

使用された石垣の長さは万里の長城よりも長いそうで、世界遺産に指定されている。観光のアクセスは鉄道に集中しているため、まだオフシーズンにもかかわらずリオマッジョーレ駅のホームは人混みで一杯だった。その混雑が原因か？トンネルの暗い中で30分以上列車が止まっても出発まで何のアナウンスもなく、イタリアらしさを垣間見た。その後、ラ・スペツツィアで再びバスに乗り換えて北上し、アペニン山脈を越え、ポー川（イタリアで1番長い川）で形成されたロンバルディア平原に入った。ここは大穀倉地帯でイタリア人の胃袋を支えてきた黄金の土地だ。生ハムやパルミザンチーズなどでよく知られるパルマに立ち寄り旧市街の観光を行った。豊かな地域で早くからイタリアの



ドロミテの山

自治都市として栄え、ルネサンス文化の花を咲かせた。立派なドゥモオや宮殿が当時の繁栄を偲ばせてくれた。元サッカー選手の中田英寿選手の所属したチームがこの場所にある。パルマに近いバルサミコ酢で知られるモデナに泊まった。

翌日は、オーストリア国境に近いドイツ文化色の強いボルツアーノ(第一次世界大戦でイタリア領)まで北上した。ここは、ドロミテ街道(ボルツアーノ⇄コルティナダンペッツォ:100km)の入り口にあたる。ドロミテ山塊とはドロマイト(CaCO₃・MgCO₃)というサンゴ群で構成された岩石で形成され、海底の隆起により造られた山々の呼称だ。街道沿いには侵食によって垂直に切り立ったドロミテの山々(標高3000m級)がたくさん空に向かって屹立しているところだが、その姿は雲に隠れ見られなかった。途中、針葉樹林に囲まれたエメラルド色の美しい小さな湖(カレッツア湖)に立ち寄ったが、ここでも針葉樹林のバックにある山々を拝むことができなかった。街道の中で最も高いポルドイ峠(標高2239m)に到着するとついに雪が降り出し、ガスで周囲が見えない最悪の状態になった。今日はドロミテの雄姿を拝むのは難しいと半ば諦めの気持ちになっていた。ところが街道の最終地点のコルティナダンペッツォに近づくにつれ、雲が少しずつ切れだし、その切れ間から光が差し込み残雪の山々の一部が姿を出しはじめた。バスの中から一斉にバンザイの歓声が上がった。ホテルに到着した頃には、周囲の山々はもう惜しみなく我々の前にその雄姿をだして迎えてくれた。明日への期待もふくらみ、夕食は開放感に溢れ、誰が晴れ女で晴れ男かの話で大いに盛り上がった。



ドロミテの山

今日は朝から晴れ渡り、ドロミテ街道の東側にある3つの湖(ドッピアーク湖、ブライエス湖、ミズリナー湖)の周囲を散策、観光客も少なかった。青い空を背景に残雪のある山々の頂きや稜線がくっきりと湖面に映し出された朝の静かな光景を独り占めできた。午後から山に囲まれ、盆地(標高1200m位)になっているコルティナダンペッツォの遊歩道(鉄道跡地)を散策した。ドロミテ山塊をバックに山の懐にある緑の牧草地はタンポポの黄色い花が一面に咲き誇り、美しい山小屋と大変マッチし、牧歌的な雰囲気を充分味わった。中学生の頃に記憶した猪谷千春とトニザイラーが冬季オリンピックで競った場所がこの地であることを知って大変感動した。

次の日はドロミテとも別れ、ロンバルディア州にある湖水地方に移動した。氷河によって造られた湖がいくつも点在し、その中で、イタリア最大の湖ガルダ湖とヨーロッパ最深のコモ湖を訪ねた。昔は水運で重要な地域のためいつも争奪の場になったところだ。ガルダ湖に突き出た細長い岬の先端にあるシルミオーネの町に立ち寄った。ローマ時代の遺跡、スカラ家の城砦、それに硫黄臭の温泉があった。コモの町では、ステンドグラスが印象的なドウオモや大理石の外壁が美しい市庁舎等を見学し、その後、湖畔を散歩した。湖畔にはヴォルタ博物館があり、電池発明者のヴォルタの生誕地として知られている。ここは昔から絹織物の生産地(現在もヨーロッパの中心地)だそうだが、それらしい雰囲気を感じるとするには自由時間が少なく、パッケージ旅行の悲哀をまたまた感じた。



逆さマッターホルン

最後の観光は、コモから300km先にあるフランス、スイスの国境近くまで行き、マッターホルン(4477m)やモンブラン(4808m)の雄姿を拝むことだ。途中、ミラノ近郊にある水田の水面が、太陽の光によってキラキラと輝いていた。到着までこの天気が続いて欲しいと願う全員の思いが伝わってきた。アルプス近くのヘヤピンカーブを曲がると、一瞬バスの中からマッターホルンの頂が見え、拍手喝采が起こった。しばらく走ってバスは小さな池の近くで止まった。残雪の小高い丘を急いで

よじ登ると池の湖面に映し出された逆さマッターホルンが雲に隠れず我々を待っていてくれた。まさに旅のフィナーレにふさわしい光景だった。しばらくすると頂は雲に隠れて、二度と顔をださなかった。

毎日、天気ばかり気にしたツアーからやっと開放された。

(図書グループ 平江)

「私の細道」(その6)

鹿沼

芭蕉の「おくのほそ道」では、「室の八島」の章段の次は「日光」となる。しかし、曾良の旅日記にはこの間の道程が詳細に記録されている。曰く、(陰暦) 3月29日、室の八嶋から壬生を経て吉次ガ塚を見、楡木を経て鹿沼に至る。鹿沼で泊。翌4月朔日(1日)文挾、板橋、今市、鉢石を経て日光東照宮を拝観、その夜は上鉢石町の五左衛門宅に宿す、とある。

4月23日(火)、私はこの行程を辿ってみた。若葉の常磐道と北関東道を経て、10時前「室の八嶋」の大神神社に着いた。2ヵ月半振りである。季節は移り、躑躅が咲いていたが、前回と同様ひと気は無かった。

今回は、「室の八嶋」から「鹿沼」までの旅程を紹介しよう。

室の八嶋のある惣社から壬生までの途中に思川を渡る。この辺りは湿地帯で、水煙が立ち込めるであろう趣きがある。本来の歌枕の地はこの辺りかもしれない。壬生は旧城下町で、街並の一角はその趣きを伝えるべく整備されている。

壬生道(352号線)を鹿沼方面に向かうと、稲葉という交差点の道路右手の田圃の中に小さな祠がある。「吉次ガ塚」である。義経が頼朝の追跡を逃れて奥州平泉に向かう途上を庇護したとの言い伝えのある金売り吉次の墓である。祠には立札があり、義経の伴をした吉次がこの地で病に斃れたとある。吉次は伝説上の人物だとも、義経が平泉まで逃れる道を影で守り続けた修験者軍団であるとも云われている。



揚げひばり吉次ガ塚はこの下と 俊夫

「おくのほそ道」にはいくつかの側面がある。

文学的極みの旅、歌枕を訪ねる旅、芭蕉の心境確立の旅、政治的側面のある旅等と共に、先人を訪ねる旅でもあった。芭蕉の愛するその先人のひとりが義経であったとも云われている。平泉で詠んだ名句「夏草やつわものどもが夢の跡」のみならず、福島「瀬の上」に義経の忠臣佐藤兄弟ゆかりの旧跡を訪ねるなど、おくのほそ道の一部は義経ゆかりの道でもあった。「吉次ガ塚」を少し進み、楡木に入る頃、小さな古墳が見える。「判官塚」と呼ばれ、やはり義経伝説が残っている。

鹿沼に着いたのは正午前であった。まず、鹿沼市役所観光課を訪れ、芭蕉ゆかりの史跡を問うた。特に知りたかった事は、芭蕉らが鹿沼の何処に宿したかであった。観光課からいくつかの関連施設を紹介して頂いた。

まず、曹洞宗禅寺「光太寺」。小高い山の中腹にあり、寺庭に「笠塚」由来の碑が置かれている。「芭蕉らの旅は雨続きであり、古編み笠の雨漏りを危ぶんだ芭蕉は寺で新しい笠に替えて日光に向かった。芭蕉の死後、その古笠を塚に納め供養にした。」と記載した説明板がある。更に、「口碑伝承によると、光太寺に一夜を過ごした」とも記載されている。この寺に宿した可能性はある。



光太寺

観光課から得た芭蕉関連の情報を下に、東武線新鹿沼駅構内の芭蕉木像や、まちの駅「新鹿沼宿」にあるチェーンソーで刻んだという芭蕉と曾良の木像を見て、句碑があると云う「屋台のまち中央公園」に行った。

鹿沼は「屋台のまち」でもある。伝統文化として、豪華な彫刻屋台が国重要文化財に指定されている。たまたま、この彫刻屋台の見学に来た春日部の一行がガイドボランティアの案内を受けているところに遭遇し、仲間に入れて頂いた。そのボランティアの女性に芭蕉史跡の事を問うたところ、案内しましょうと応じて下さった。

案内に従って訪れたところが「^{きくすいえん}掬翠園」。明治末期に麻商長谷川唯一郎氏が造営し、当時の鹿沼三名園のひとつで現存する唯一の庭園だそうだ。泉池、古木、奇岩の奥に、芭蕉句碑が配されている。



入あひのかねもきこえすはるのくれ 風羅坊

風羅坊とは芭蕉の別号で、碑銘は芭蕉の真蹟詠草を模刻したものだそうだ。揚句は曾良の「俳諧書留」にあり、鹿沼での作と云われている。

緑陰に沈み尽さず翁句碑 俊夫

その庭園のすぐ側に、鈴木屋という呉服屋があるが、昔からの豪商にて、芭蕉らが宿泊したのは鈴木屋であるとの説もあるらしい。通りを裏に廻ると芭蕉翁書簡の碑がある。

今宮神社にも芭蕉の句碑があり、鹿沼の、芭蕉宿泊に対する思いは並々ならぬものがあると見た。鹿沼は、まだまだ去りがたく思ったが、その日の内に日光まで行かねばならず、午後2時にはこの地を発ち、例幣使街道（121号線）の杉並木を北上した。

（ パートナー 小松 ）

「パートナー情報誌 香澄」原稿募集

香澄編集部会では「香澄」に掲載する原稿を募集しています。内容は問いません。センターでの活動内容や、趣味などなんでも結構です。原稿はパートナー室のメールボックスに入れていただくか、編集委員に直接お渡しいただいても結構です。

（「パートナー情報誌 香澄」編

【編集後記】平年より2週間も早く梅雨が明け、急激に真夏の気温になりました。【香澄】の編集作業をしている小部屋の温度計は34度を指しています。もともと暑さには強いと自負していましたが、昨日は危うく熱中症で倒れるところでした。昼前、大きく間延びしたネギを植え替えようと、穴掘り作業をしておりました。もちろん水はがぶ飲みですから、汗が滝のように流れます。そのうち背中に容赦なく照り付ける太陽に痛さを感じたと思ったら、急にめまいがし、吐き気がしたのです。慌てて日陰へ隠れて、バケツの水を頭からぶっかけました。心臓の鼓動はしばらく急でしたが、10数分で正気に戻れたのは幸運でした。もう無理はきかない年齢であることを自覚した一件でした。(H)